

日本人と単語集

— 日本における英語語彙学習教材史：江戸編 —

A History of Materials for English Vocabulary Learning in the Edo Period

熊谷允岐

Masaki KUMAGAI

キーワード

単語集、英語教育史、英学史、江戸時代

wordbooks, history of English language teachings, history of English language studies, Edo period

Abstract: This study explores the history of wordbooks for English vocabulary learning during the Edo period, focusing on why each wordbook was made and how they changed over time. In the Edo period, Dutch interpreters made the first wordbooks for improving their speaking skills of English, and also for protecting their nation from other countries. After the opening of Japan to the world in 1854, however, subsequent wordbooks started to be made to promote Western culture through vocabulary learning. Specifically, several wordbooks were made not only for interpreters but also for ordinary people who needed to engage in trade with foreigners. Some creative arrangements of such wordbooks in those days allowed ordinary people, who were completely unfamiliar with English, to learn vocabulary more easily. Wordbooks became more variable in content at the end of the Edo period, and this diversity was the root cause for the high number of wordbooks that existed at the beginning of the Meiji period. Currently, wordbooks are generally associated with preparation materials for entrance exams, but surprisingly they were already being made in the Edo period for various reasons and with a high level of originality. This can be a historical fact that we should keep in mind in considering how wordbooks need to be compiled in the future.

1. はじめに

わが国における多くの英語学習者は語彙を学習する際に、語彙学習教材、いわゆる単語集を用いて語彙習得に励んだ経験が一度はあるだろう。石川 (1998) も「単語集は、今や、英語学習に欠くことのできない副教材」(p. 16) だと述べているとおり、日本人英語学習者の多くは語彙を学習する際に、単語集を用いるのが以前よりあたりまえの学習法となっていることはたしかである。

しかし単語集が日本人英語学習者のあいだで普及して久しいにもかかわらず、単語集が英語教育史の観点から包括的に研究されることはほとんどなかった。江利川 (2011) も指摘するように、参考書が日本人の英語力向上に大きな役割を果たしてきた点は見逃すことができない。参考書の下位分類である単語集もまさに、それらの重要な部分を担っていることは明白である。したがって、日本における英語語彙学習史を語るうえで単語集は不可欠な存在であると本研究者は考える。

そこで本研究者は全国各地の書店に散在する単語集を、そして現在入手困難なものに関しては国立国会図書館の資料を頼りとし、収集・調査を始めた。調査対象は江戸期から現代までとし、その収集書数¹はすでに 500 冊を超えている。本研究者が博士課程において突き詰めようとしているテーマは、過去から現代における単語集の分類・評価を試み、各時期における日本人英語学習者の諸相を掘り下げることによって得られた知見をもとに、今後の日本人英語学習者に有用だと考えられる、新たな単語集の雛形を考案することである。過去をかえりみずして現代、ひいては未来への提言を行うことはできないという信念がそこにはある。したがって本小論は、今後編纂される単語集のあるべき姿に対して、一つの解答を導き出すことをめざすために行われた研究の一端である事を予め述べておく。

2. 本論文の研究目的

本論文ではわが国で英語学習が始まった江戸期に焦点をあて、単語集の変遷を包括的に辿る。当時は未知の言語であった英語の語彙を学ぶため、日本人はどのような単語集を編纂したのか。またそれら編纂物から垣間見える、日本人の語彙学習に対する創意くふうにはどのような点がみられるのか。そして日本人はそれら単語集を通じてどのように語彙学習と対峙し、それらの習得に奮闘してきたのだろうか。単語集という観点から、日本人の語彙学習に対する向き合い方をとらえ直し、当時の日本人と単語集の関係性を探究していく中で、それらから得られた知見をもとに、今後の英語語彙教育に対していささかの示唆をあたえることができれば幸いである。

3. 単語集とは何か

単語集というものを広義でとらえれば、「単語を集めた物」ということになるであろう。しかし本研究ではそのような広義の意味で単語集をとらえるのではなく、「語彙を記憶する教材」という意味でとらえたい。古くは赤尾 (1934) が、単語集の目的とは「引くための dictionary ではなく、覚えて活用する」(p. 10) ためのものだと述べ、同著者は 1950 年の著書のはしがきにおいても「引いてもらつては困る。常に読んでそしやくして頂きたいのである。そして自分のものにして頂きたい」(p. ii) と主張している。このような考え方は現代においても一貫性を保っているようで、櫻井 (2000) や投野 (2015) も同様の主張をしている。この記憶するという点が単語集の有するもっとも重要な役割であると本研究者は考えている。一方、辞書とは赤須 (2016) など

も述べるとおり、語彙の検索がおもな目的であり、単語集の使用目的とは合致しないため混同してはならないものの一つである。

また単語集に類似したものには語彙リスト²がある。ただし語彙リストも杉森(2017)などが指摘するように、従来は単語の「リスト」にすぎず、語の意味や用例等は通常省かれている。語彙リストとは学ぶべきもっとも有用な語彙を提示することがおもな目的だからである(Webb & Nation, 2017)。つまり「学習者にとっては語彙学習の目的を明確化し、最小限の時間で有効な語彙を記憶する上で、非常に重要な位置を占める」(投野, 1997, p.88)役割はあるものの、その明確化された目標語彙をどのように記憶にとどめるかについては、語彙リストが扱う範疇ではないのである。一方、単語集の主要な目的は語彙を記憶することであるからすれば、必然的に見出し語に対する語義が掲載されていることも想像に難くない。以上のことから、本研究において単語集とは以下の3条件を原則的に満たすものであるとする：

1. 語彙を検索させるというよりも、記憶させることを主としている
2. ある特定の目的に合わせて語彙が選定されている
3. 見出し語に対して語義が掲載されている

4. 単語集の収集方法

本研究では右記の先行研究資料『日本英語學書志』(1931)、『日本英学資料解題』(1962)、『日本英学資料解題(補遺)』(1963)、『蘭学英学資料選』(1991)、『洋学資料総目録』(2000)を中心に、単語を学習する参考書として分類されているものについて適宜内容を確認し、前節であげた三つの条件を原則的に満たしていると判断したものを単語集と定め、本研究でとりあげた。各資料の内容は国立国会図書館デジタルコレクション、早稲田大学古典籍データベース、近代書誌・近代画像データベース、『初期日本英学資料集成』(雄松堂フィルム出版, 1976)を中心に用いて調査を進めた。書名は判明しているものの、先行研究における言及が乏しく、かつじっさいに内容も確認できなかった教材に関しては、本研究では原則取り扱わなかった。

5. 単語集の歴史の変遷——江戸期——

本研究では単語集の編纂時期をもとに、江戸期を黎明期(1808年～1811年)・閑散期(1812年～1853年)・揺籃期(1854年～1868年)の三つに区分した。それぞれの時期における英学史の潮流、および編纂された単語集の特徴を概観したうえで、当該時期における単語集の評価、および日本人が単語集を通してどのように語彙学習と対峙してきたかについて、本研究者の調査結果を交えながら考察していく。

5.1 単語集黎明期——英語学習の始まり——

1808年、一隻の英国船がオランダ船を装い長崎港に侵入した。オランダ人を人質にとり、薪水と食料を要求してきたのである。しかし日本には撃退するだけの警護が整っておらず、相手方の要求を飲まざるをえなかった。これが有名な「フェートン号事件」である。この事件は日本の抱える多様な問題点を浮かび上がらせた。それは国防意識の低さ、国防それ自体の脆弱さ、そして英語によるコミュニケーションの問題であった。当時の日本における外交用語はオランダ語であったため、フェートン号の艦長との交渉においても、通訳を介する必要があったのである(鳥

飼、2012)。このような問題点は、当時の幕府も同様に痛感したに違いない。翌年2月には幕府より長崎のオランダ通詞団に対して、英語修業が命じられた。さらに同年7月に来日したオランダ商館荷倉役、ブロムホフに通詞たちの教育を委嘱し、口頭教授による英語教育が始まった。名実とともに、これが日本における英語学習の始まりである。

5.2 単語集黎明期——日本最古の単語集——

わが国の単語集の歴史は英和辞書の歴史よりも古い。日本初の対訳英和辞書『^{アングリア}諸厄利亜語林大成』は1814年に編纂されたが、日本初の単語集はその3年前にすでに存在していた。それは『諸厄利亜言語和解』(以降、『言語和解』)と『諸厄利亜興学小筈』(以降、『興学小筈』)という2冊の英学書の一部に収録されている。これら単語集は日本における語彙学習教材の始祖ともいべきものである。

5.2.1 『諸厄利亜言語和解』(1810-1811)

『言語和解』は、幕府から英語就業の命を下された際、吉雄権之助、猪俣伝次右衛門、岩瀬弥十郎の3名により編まれ、長崎奉行所に差し出された。全3巻で構成されており、そのうち第一巻は1810年12月、第二巻および第三巻が1811年2月に完成し、長崎奉行所に差し出されている。これら3冊本のうち、岩瀬弥十郎が著した第三巻が単語集である。もう一方の『興学小筈』は1811年の7月に完成し、同年9月に長崎奉行所へ提出されたことを考えると、『言語和解』は『興学小筈』よりもわずかに早く完成をみた、日本における最古の英学書と呼ぶことができると同時に、『言語和解』の第三巻に限って述べるならば、日本最古の単語集と呼ぶこともできよう。もともとは東京大学図書館に同名の写本があったが、関東大震災の年に焼失してしまい、現存しない。したがって本の全貌を参照することはできないものの、勝俣銓吉郎が取ってあった控えから、その一部を垣間見ることができる。勝俣(1936)によれば、第三巻は‘A creature’に始まり‘A physician’に終わる、419語の分野別単語集だという。当該の単語集部分において、勝俣は詳細な言及をしていないため、見出し語とともにどのような情報が付随していたかは不明である。しかし第一巻の対話集には詳しい言及がある。それによれば、英文は横書き、訳文は縦書きで、双方黒墨で記されている一方、英文に対応した発音は縦書きの片仮名で朱墨を用いて記されていたという。

従来『言語和解』の底本が何であるかについては、さまざまな憶測がなされてきた。しかし田野村(2017)が改めてその問題を取り扱い、その底本をE. Evansの*A new complete English and Dutch grammar*第二版(1778)、あるいは第三版(1792)であることを突き止めた。『言語和解』第三巻の単語集に話を絞れば、その依拠資料はEvansの語学書の第二部、*Second part of the English and Dutch grammar*に含まれる、英蘭対訳の意味分類別語彙集*A vocabulary, English and Dutch*である可能性が高いとしている。なぜならば、この語彙集は現に‘A creature’から始まり、勝俣(1936)が報告する『言語和解』の内容と一致するからである。

片仮名による発音表記における苦勞の跡は、『言語和解』の対話集部から読み取ることができる。たとえばweatherは「ウェードル」、theは「デ」など、現代のわれわれが知るものとは大きく異なる発音が記されているが、これはオランダ語の影響を受けているからである(鳥飼, 2012)。したがって、当時の英学書における英単語の発音表記は、いささか正確さに欠けていたと言わざるをえない。

5.2.2 『語厄利亜興学小笈』（1811）

『興学小笈』は『言語和解』と同様にフェートン号事件を引き金とし、幕府から英語修業の命が下った際に編纂された。本木正栄を中心に編まれたもので、全十巻を合本3冊に綴じたもので構成されている。内容は「類語大凡」「平用成語」「学語集成」の三つから構成され、そのうちの「類語大凡」が単語集とされている。先述のとおり『言語和解』は焼失してしまったため、『興学小笈』は現存する日本最古の英学書であり、そのうちの「類語大凡」は現存する最古の単語集と呼ぶことができる。原文はすべて縦書き、発音は片仮名表記、見出し語の発音のみが朱書きされているような点は『言語和解』にも通ずる特徴である。

「類語大凡」は乾坤部（天文・地理など）をはじめとした部門別によって見出し語が配列された分野別単語集で、大きく10の部門に分けられている。伊藤（2005）は、「類語大凡」のような「天文」に始まり「言辞」で終わる分類法は、元来中国ならび日本において存在していた「類書」（語彙分類を通して、世界観や文化観に対する理解を記述した書物）における分類法の一つだとしている。つまり伊藤は著者の本木が、底本から選定した語彙を類書の方法にもとづいて分類し、森羅万象を英単語により構成して表現していると解釈している。

「類語大凡」の底本についても田野村（2017）が、『言語和解』と同じEvansの*A new complete English and Dutch grammar*第二部における類別語彙集であると報告している。田野村によれば、当該語彙集の六割強程度が「類語大凡」に収録されているという。「類語大凡」における見出し語の発音は片仮名で表記されていることは述べたが、先の『言語和解』と同様にオランダ語発音の影響を多分に受けており、必ずしも英語の正しい発音とは一致しない。

5.2.3 単語集黎明期における考察

『言語和解』第三巻と『興学小笈』の「類語大凡」には共通する特徴が多くある。第一に両単語集には共通の蘭英語彙集が底本として存在するという点があげられる。本研究者の調査によれば、もともとの底本には約3800語が見出し語として収録されているようである。しかし一方で『言語和解』第三巻の総語数は419語、「類語大凡」の総語数は2339語であるため、各単語集の編者、岩瀬と本木は自身で適宜語彙を選定していたと考えられる。これは当初より単語集が、できる限り多くの語彙をとりあげて記述する辞書のような体裁をとらず、著者がそれぞれの価値判断により学習者にとって有用だと思われる語彙を選定し、効率的な学習をうながすくふうを凝らしていたと考えることができよう。

第二に両単語集は英語を用いた会話力養成のために編纂されたという点があげられる。当時の長崎通詞らに求められていた英語力とは、とくに異国人との交渉に要する会話力であり、読み書きの能力ではなかった。先にも述べたとおり、『言語和解』の第三巻は単語集にあたるわけだが、ほか二巻は対話集であり、それらも含めて一つの編纂だとみなさなければならない。同様に「類語大凡」も単語集ではあるが、一つの独立した著作ではなく、「平用成語」の例文集および「学語集成」の対話集を加えて、『興学小笈』という英学書を構成している。つまりこれらの単語集は、英語の会話力育成にあたって必要な基礎学力を身につけさせる役割を担っているのである。このことは『興学小笈』の凡例からよくわかる。凡例（現代語訳）では：

本書の「類語」(vocabulary) を学習し、『平用成語』(familiar phrases) の課程をへて、『学語集成』(dialogues) の段階を熟達し、語句の連続・脈絡関係を滞りなく明らかにし、年月を積み、業績をかさねて、この学問の真髄に達すれば、このことは非常の事態にそな

えるひとつの大切な務めであって、説得、対談、通訳も自由自在となるであろう (井田, 1982, p.24)

と記されており、英語を語から句、そして会話へと段階的に学習できるような配慮がなされ、英語を用いた会話力を育成することが最終的な目標であることが明確に示されている。しかし奇妙なのは、『興学小笈』では単語集が初めに配置されている一方、『言語和解』は第三巻、つまり当該の英学書における最後部に単語集が配置されており、『興学小笈』とは逆の体裁をとっている点である。両単語集の底本も語彙、会話文の順序で掲載されているため、著者の岩瀬はなんらかの意向でその順序を逆転させたのだろう。段階的に会話力を育成するのであれば、『興学小笈』のような体裁が一般的であるかと思われる。しかし本研究者の知る限り『言語和解』がそのような体裁を取らなかった理由は他の先行研究でも言及されておらず、今後の研究が待たれる。

第三には、見出し語の発音が片仮名で表記されており、それらにはオランダ語の影響が強く現れている点があげられる。現代の単語集では、発音記号になじみのない学習者に便宜を図る目的であえて片仮名表記を採用するものが存在する³。しかし日本における最初期の単語集が編纂された当時は、発音記号の表記法が流入する前である。したがって、通詞たちは『蛮語箋』(1798)などのオランダ語と日本語の対訳語彙集が編纂されたところより採用されている発音表記の手法を、英語の単語集にも援用したことはたしかであり、現代のいくつかの単語集が片仮名発音表記を採用した経緯とは異なる。しかし日本人英語学習者に対して異国の言語を片仮名読みさせ、発音の便宜とさせるくふうは古くから現代にかけて一貫しているともいえる。それだけ片仮名とはわれわれ日本人に強くなじみのある言語表記法の一つであったに違いない。それぞれの英単語の発音が片仮名で表記され、かつそれらはオランダ語の発音の影響を受けてしまっているので、当時の両単語集で学んだ通詞たちが、正確な英語を発音できたとは考えづらい。ただし、発音に不完全さがあったとはいえ、それが英語の語彙習得に結びつかなかったかといえれば必ずしもそうではないだろう。ここで重要なのは、単語集を編纂した当時の通詞たちは、母語が日本語であると同時にオランダ語を対外交渉に使用できるまでに習得した語学のエキスパートでもあった点である。単語集編纂に用いられた底本も蘭英対訳の書物であり、オランダ語に堪能でなければ到底扱えるものではない。とくに「類語大凡」の著者である本木は、オランダ語の知識のみでは英単語の新たな訳をつくり出すことができないという問題をすでに認識しており、フランス語の知識も活用していたことを川澄 (1988) および三好 (2014) が報告している。そのような点から、当時の通詞たちの言語学習に対する素養を読み取ることができよう。つまり当時の彼らは正確な発音の習得に難があったとはいうものの、オランダ語を習得した経験と知識をもとに、また時にはフランス語の知識をも活用しながら、新たに英語の語彙学習を進めていたのである。言い換えれば、ヨーロッパの近接言語における形態素、あるいは語彙の類似性から英単語の意味を類推し、それらに日本語訳を当てはめていたのである。したがって当時の通詞たちはさまざまな知識を活用し、ある程度の語彙習得は可能であっただろう。当然そのような学習のなかからうまれた単語集であるからして、それらも決して質の低いものではない。事実、発音に関する創意くふうについては鳥飼 (2012)、語彙の訳し分けについては三好 (2014)、訳語のくふうについては渡辺・川端 (1962)、掲載語順については伊藤 (2005) がそれぞれ肯定的な評価を下している。とくに伊藤 (2005) も指摘するとおり、見出し語の配列において当時まだ一般的ではなかったアルファベット順ではなく、分野別を採用したことは、英語学習を容易にさせようとする本木のすぐれた見識であり、本研究者も同様に興味深く思う点である。語彙習得理論の観点から述べれば、「類語

大凡] が提示するような分野別の語彙のまとまりを Tinkham (1997) は “semantic clusters” と呼んでいる。分野別で語彙を学ぶ効果は意見の分かれるところであるが (Nakata & Suzuki, in press)、一定の習得効果は認められるようである。このように現在でもとりあげられる語彙の学習法が、江戸期の単語集にすでに取り入れられていた点は非常に驚くべき点であるとともに、編纂者たちの語彙習得に関する知識の深さがうかがわれる。単語の発音を片仮名で表記するという方法も、異言語をすでに学んでいた通詞だからこそ知り得た知識であり、当時の通詞たちの異言語に対する感覚の鋭さ、そしてその吸収力の高さを評価することができよう。

5.3 単語集閑散期——鎖国崩壊まで——

1810 年から 1811 年にかけて『言語和解』と『興学小筈』がそれぞれ幕府に献上されたが、両者ともに補訂は行われず (伊藤, 2005)、少数の通詞らに利用されたのみでその役目を終えた (大村・高梨・出来, 1980)。当然学習用として一般人に用いられることはなく (出来, 1994; 松村, 1978)、幕府の秘蔵本として後続の単語集には直接の影響をあたえることはなかった (渡辺・川端, 1962a)。のちにオランダ通詞たちは長崎奉行所より英語の辞書を編纂せよとの命が下り、『興学小筈』と同著者である本木を中心とし、1814 年に『語厄利亜語林大成』(以下、『語林大成』) を編纂し、幕府へ献上した。『語林大成』の跋文には「海浜風漂の虞に備ふ」とあり、本書の編纂も前節にあげた単語集と同じく、幕府が自国を防衛するための一環であった。しかし 1814 年の『語林大成』以来、長崎における英語研究は大した発展を見ることもなく、単語集を含め英学書の編纂は行われなくなってしまった。一番の大きな理由はフェートン号事件以後、長崎に異国船の渡来が少なく、英語を実際の場で用いる機会がなかったからであろう (奥村・林, 1959)。

一方、江戸周辺においては異国船が入港する事件がいくつか発生した (表 1 参照) もの、交渉はほとんどオランダ語で進められたため、長崎と同様に通詞もわざわざ英語を学習する必要はなかったといえる。1825 年には幕府が異国船打払令を敷いたことで、日本人の英語研究に対する熱意はより弱まっていったのである (竹村, 1935)。このような状況下では、英学書が新たに編纂される必要もなく、それは単語集もまた同様であろう。1830 年に 1 冊、W. H. Medhurst の *An English and Japanese and Japanese and English Vocabulary* という単語集の類が編纂されているが、本書は日本人向けに編纂されたものではない。本書はバタビアで刊行され、日本語を学びたい外国人のためにつくられたものである (河元, 2003)。したがって本書は日本において出版された単語集だとはいえないものの、本書はのちに『英語箋 (一名米語箋)』(1857) と名を変え日本で翻刻を果たし、英単語集としてわが国の人びとに利用された点は注目に値する。

1842 年になると異国船打払令が解除され、来航する外国船舶の数は日を追うごとに増えた。米国人による英語教授や、新たな辞書編纂の動きもみられたものの、新たな単語集が編纂される様子はしばらくみられなかった。新たに単語集が編まれたのは 218 年の長きにわたる鎖国政策が崩壊した、1854 年を待たなければならない。

5.4 単語集揺籃期——開国から大政奉還まで——

日本が開国した 1854 年から大政が奉還された 1868 年までの 14 年間は、洋学の中心が蘭学から英学へと移行し始める時期でもあった (奥村・林, 1959)。竹村 (1935) も述べているとおり、英語を学ぶ理由が国防のためのみならず、積極的に西洋の文化、知識を吸収しようという理由へと移っていったのである。そのような時勢に呼応するかのごとく、単語集の編纂が盛んに行われ始めたのもこのころである。本研究者の調査によれば、単語集揺籃期のなかで編纂された単

語集は15冊であった⁴。当時の単語集に関しては原口(1991)、櫻井(2000)が分類を行っている。それらをまとめると単語集は、民間が編集した単語集と、幕府管轄の洋学研究機関から発刊された官版の単語集二つの系統に分けることができる。以下がその分類である：

— 民間出自の単語集 —	— 官版の単語集 —
『三語便覧』(1854)	<i>Gemeenzame Leerwijs</i> (1857)
『一名米語箋』(1857)	<i>Familiar Method</i> (1860)
『ゑんぎりしことば』(1860)	『英吉利単語篇』(1866)
『増訂 華英通語』(1860)	『英仏単語篇注解』(1867)
『英語箋』(1861)	『英仏単語便覧』上巻(1868)
『飛良賀奈英米通語』(1864)	
『英吉利文典字類』(1866)	* 出版元不明
『絵入 英語箋階梯』(1867)	『対訳名物図編』(1867)
『和英初学便覧 初編』(1868)	

5.4.1 民間出自の単語集

出来(1994)によれば民間出自のものなかでも、『一名米語箋』、『ゑんぎりしことば』、『増訂 華英通語』、『英語箋』などはかなり広く流布したとされる。また『三語便覧』にいたってもたびたび刷を重ねたとされている(渡辺, 1962; 櫻井, 2000)。

以下表2も示すとおり、江戸方面における洋学校は1855年を境に名称が頻繁に変わり始めたが、じっさいに英語の授業が開始されたのは1860年で、それまでは蘭学がおもに教授されていた。長崎においても1857年には洋語伝習所が開設され、わずか3年ではあるが、江戸よりも早く英語の授業が開始された。このことは1860年前後に江戸と長崎において英語学習が重要だという共通認識が広がりつつあったことの証左であろう。当時の一般庶民のほとんどにとって、英語は未知の言語であったが、民間から発刊された単語集のなかには、黎明期の単語集には見られない特徴を含むものがいくつか見出される。それは全編のほとんどが仮名文字のみで表記された単語集と、見出し語の理解をより促進するため、訳語に加えて挿絵が用いられた単語集である。

1859年は横浜開港の年であり、横浜では通商のためだけの簡易な英語が使用されるようになった(斎藤, 2001)。その時期に発刊された『ゑんぎりしことば』(1860)は、わが国初の全編をほぼ仮名文字のみで表記した単語集である。本書は外国人との商いを目的とした人に向けた実用英語教本で、和英辞書のような形式をとった単語集である。日本語の見出し語は平仮名で表記され、それに対応する英語の単語や表現も片仮名で表記されている。このようにすることで、当時の庶民がより簡便に語彙力・会話力を習得し、次々とやってくる外国人に対して商いを行えるようにすることをめざしたのである。

また『ゑんぎりしことば』では「こゑのつかひかた」というセクションを設け、そこで英語と米語の相違に関する記述や、発音器官の使い方などを具体的に説明している。このような点は本書が初の試みであり(渡辺・川端, 1962b)、当時としては類を見ないほど質が高いとの評価を受けている。

表 2 単語集揺籃期における東西洋学校の変遷と主要な日本の動き

西暦	年号	江戸方面の洋学校	長崎方面の洋学校	その他	単語集
1854	安政元年			日米和親条約・下田と函館開港	『三語便覧』
1855	安政2年	蚕書和解御用方→洋学所			
1856	安政3年	洋学所→蕃書調所			
1857	安政4年		洋語伝習所		『一名米語箋』 <i>Geneerzame Leerwijs</i>
1858	安政5年		洋語伝習所→英語伝習所	5カ国通商条約	
1859	安政6年			蕃書調所に英和辞書編纂を命じる／福沢諭吉が英学へ転向	
1860	万延元年			蕃書調所にて英語授業開始	<i>Familiar Method</i> 『えんぎりしことば』『増訂 華英通語』
1861	万延2年				『英語箋』
1862	文久2年	蕃書調所→洋書調所	英語伝習所→英語所		『英和对訳袖珍辞書』
1863	文久3年	洋書調所→開成所	英語所→洋学所		
1864	元治元年		洋学所→語学所		『飛良賀奈英米通語』
1865	慶応元年		語学所→済美館		『英吉利文典字類』『英吉利単語篇』
1866	慶応2年				『絵入 英語箋階梯』
1867	慶応3年			大政奉還	『英仏単語篇注解』
					『対訳名物図編』
1868	慶応4年	開成所→開成学校	済美館→広運館		『英仏単語便覧』『和英初学便覧 初編』

注：筆者作成。表内の1868年とは明治改元前日の9月7日までをさす。

1867年に刊行された『絵入 英語箋階梯』もまた、当時の庶民の英語学習の様子を理解するに適した単語集である。本書は分野別単語集の一つである『英語箋』(1861)に掲載されている「鳥之部」のみをとりあげ、見出し語に対応した絵を付けて発刊したものである。本書の序文には、当時の庶民は片仮名さえも読めないものが多く、語彙を理解し易くするために挿絵を取り入れた旨が書かれている。丸山(2017)によれば、単語集に挿絵を施した本書は後続の絵単語集の最初であるという。一方、初めて挿絵を採用した英和辞書は、1873年に発刊された『附音挿図英和字彙』(柴田・子安編)とされている(竹中, 2008)。本書は辞書よりも早く挿絵を取り入れた単語集として注目に値するものである。鳥の挿絵はすべて彩色され、精緻に描かれている。

また1867年に刊行された『対訳名物図編』は書名のとおりに見出し語に対して挿絵を添える単語集のはずであったものの、それらが入るべき部分は空白のままでも描かれていない。著者の買山迂夫および編纂に携わった画工らは、見出し語のなかには日本人にとってなじみのない概念を含んだ語彙も多く含まれていたため、それらを理解したうえで編纂に臨もうとしていたが、周囲の要望が強かったため、挿絵を入れないうまま出版をし、一応の責を果たしたのだという(竹中, 2008)。

5.4.2 官版の単語集

官版の単語集とは、いわば幕府が管轄する洋学研究機関で用いられた教科書にあたるものである(櫻井, 2000)。江戸期における官版のものでもっとも有名なものは、開成所が刊行した『英吉利単語篇』という分野別単語集である。本書が編纂の拠り所としたのは1860年に蕃書調所(表2参照)から発刊された*Familiar Method*で、これは英単語のみが収録された一種の単語・会話文のリストともいえる。もとを辿ると、*Familiar Method*は1857年に長崎の洋語伝習所がそなえ付けられていた西役所という奉行所が刊行した*Gemeenzame Leerwijs*という蘭英単語・会話集から英語部分のみを翻刻したものである。『英吉利単語篇』は*Familiar Method*における「単語の部」のみを収録したものであるが、*Familiar Method*自体に訳語がないこともあり、本書にも訳語の記載はない。ゆえに『英吉利単語篇』をじっさいに活用できた人間は、当時英語を学んでいたきわめて一部の者に限られていたと見られている⁵(櫻井, 2014)。翌年1867年には『英吉利単語篇』の日本語訳のみが収録された『英仏単語篇注解』⁶が発刊され、1868年1月には収録語彙は同じくして、英仏両語の見出し語とそれに対応する訳語が収録された『英仏単語便覧』上巻が編纂された。この時をもって、江戸期における官版の単語集はようやく同一の教材のなかに英語の見出し語と訳語が収録されるようになり、実質上単語集としての体裁が整った。

5.4.3 単語集揺籃期における考察

黎明期の単語集は幕府の秘本とされたため、揺籃期における後続の単語集に直接の影響はないことは先に述べた。それにもかかわらず、当該時期の単語集には黎明期のものと似た形式や配列で編纂された単語集が多い。本研究者の知る限り、民間出自の単語集に用いられた底本の多くもオランダ語関連の会話集、単語集などが多く用いられている。当時の日本人は英語を学び、単語集を編纂するときにオランダ語から多大な影響を受けていた様子は明らかだが、これは日本における蘭学の影響が単語集黎明期より長きにわたり連綿と続いていることもあらわしているだろう。

一般庶民に目を向けた場合、当然彼らは昔の長崎通詞のように語学に長けていたわけではない。ゆえに民間出自の単語集にはそのような一般庶民を考慮した「わかり易く」あるいは「学びやすく」を目的とした創意くふうがみられるのである。仮名文字単語集である『ゑんぎりしことば』

は1864年に若干の改訂がなされ、『飛良賀奈英米通語』と名を変え再販された。これは仮名文字単語集がある程度庶民から受け入れられた証拠でもあろう。

本書のように単語集と会話集が合わせて編まれる傾向は黎明期の単語集にもみられるものである。しかし単語集黎明期においては、国防というきわめて内向きの理由で会話力の習熟が求められた一方、単語集揺籃期においては他国との商いを目的に、言い換えれば異文化との接触を通して新たな西洋文化を積極的に摂取する目的で会話力が要求されるという、いわば外向きに転じたという意味において大きな違いが読み取れる。また英語と米語の相違や発音器官について記述する点などは黎明期の単語集にはみられない特徴であるとともに、現代の語学書にもみられるものである。当初においては出色であったと同時に、蘭学に対する過度の依存から少なからず脱却を試みているようにも見え、当時の時勢に呼応するように単語集にも変化が現れ始めた時期だと考えることができよう。

単語集に図解を添えるという着想についても同様のことがいえる。英語語彙のみでなく、異文化というものになじみのなかった当時の庶民にとって、図解単語集は非常に画期的であったに違いない。現代における英語語彙の図解方法は、認知言語学の知見を取り入れるなどし、多義性を有した基本語の理解を深めるためのコア図式(田中・佐藤・阿部, 2006)なども提唱されている。しかし江戸期の図解単語集には当然そのような概念などはなく、描写しやすく具象的な鳥などが図解されているのみにとどまるため、図解単語集としては萌芽的だとみなすことができる。しかし図解を用いて学習者の理解度向上を試みた点において、理念的には現代と大きく異なるわけではない。Lotto and Groot (1998)、Chen (1990) および Boers, Lindstromberg, Littlemore, Stengers and Eyckmans (2008) は、対象とする語彙あるいは学習者の熟達度にもよるが、図解と語彙を組み合わせた場合における一定の習得効果を認めている。したがって江戸期に編纂された図解単語集は、語彙習得の側面から見ても当時の学習者に少なからず貢献したことは間違いない。一方『対訳名物図編』は、図解単語集にもかかわらず挿絵が描かれていないという点できわめて不完全であったため、当然図解を通した語彙習得の効果は認められない。しかし本書をもとに明治期ではいくつかの図解単語集が編纂され、それは少なくとも1880年代まで続いていることが本研究者の調査で明らかとなっている。後続の単語集に対する影響力の強さを考えた場合、『対訳名物図編』も見逃すことのできない単語集の一つだといえる。

以上のように民間出自の単語集は、英語になじみのなかった一般庶民に対してなかば寄り添う形で編纂されるようになり、単語集の形態も多様化して版を重ねるものが現れた。それは単語集が日本人にとって徐々に身近な存在となってきたことを意味するものだろう。このことは、激動の時代における人びとの生活を支える道具として単語集が存在していた証だともいえよう。一方江戸期における官版の単語集は洋学校の教科書として使われたわけであるが、始めは訳語のない語彙リストのようなものから始まり、幕末によく英語の見出し語にその対訳が付され、単語集の体裁をとるようになった。このように英単語を学問の一環として学ぶために編まれた単語集は、江戸期では発展の兆しを見せ始めたばかりだと考えてよいだろう。それら単語集も、櫻井(2000)が報告するように、明治期には民間出自の単語集系統と合流することになる。そのような過程で官版の単語集が明治以降における後続の単語集にとって非常に大きな役割を果たしている点は見逃してはならない。ある時は訳語に変更が加えられ、またある時は図解が取り入れられ、単語集は明治期においてその質の高さ低さにかかわらず、多様性を増していくのである。単語集揺籃期に編纂された単語学習書の多くは、その先駆けであると言っても過言ではない。

6. まとめ

本研究では江戸期を「単語集黎明期」「単語集閑散期」「単語集揺籃期」の三つに区分し、単語集の歴史を辿ってきた。黎明期当時の通詞が英語を学ぶ目的は明確で、フェートン号事件を発端とする緊迫した状況に対する危機的意識からであった。川澄(1988)も指摘するとおり、当時英語を学ぶということは鎖国という名の国防に不可欠であったわけで、そこには政治的影響が色濃く反映されている。言い換えると英語は当初学問として学ばれていたわけではないのである。フェートン号事件を引き金に露呈した危機管理体制の甘さの責を取って自害した長崎奉行がいたように、それにともない幕命を受けた通詞たちも英語の学習、ならびに単語集を含む英学書の編纂に命がけて取り組んだに違いない。当時は満足のいく英語辞書や参考書がほぼ皆無であったにもかかわらず、最初の単語集はフェートン号事件発生の僅か2年半後という早さで幕府に献上されていることから、いかに当時の通詞が根気と気概をもって編纂にあたっていたかがわかるだろう。いわゆる現代のわれわれとは異なる動機づけで英語を学習していたとはいえ、当時の通詞たちの努力がわが国における英語学習、ひいては単語集の基礎を切り拓いた点を見逃してはならない。

一方で幕府の秘本としてその役目を終えた黎明期の単語集とは異なり、揺籃期に発刊された単語集は一般民衆向けのものや、洋学校の教科書として用いられるものが登場するなど、英語学習の必要性にともないその多様性が徐々に広がりを見せ始めた。このような転換点としてあげられる大きな出来事の一つは1859年の横浜開港である。1859年とは、ちょうど福沢諭吉が横浜を訪れた年でもある。当時の横浜の状況がいかに変化していたかを福沢は以下のように語っている：

横浜から帰って、私は足の疲れからではない、実に落胆してしまった。これはどうも仕方がない。今まで数年の間、死に物狂いになってオランダの本を読むことを勉強した。その勉強したものが、今は何にもならない。商売人の看板を見ても読むことができない。まことにつまらないことをしたわいと、実に落胆してしまった。

(『福翁自伝』p.137-138)

血の滲むような思いでオランダ語を学んでいた本人にとって、横浜の変わりようは相当な衝撃だったことは明白である。しかし驚くのは、福沢は意気消沈し横浜から帰った翌日から再び新たな志を掲げ、英語学習へ転向した点である。彼は師を仰ぐこともなく蘭英対訳の辞書を片手に、全日全夜勉強に励んだのであった。洋学者として敏捷かつ柔軟に当時の時勢に対応し、新たな言語に毅然と立ち向かうその姿は、最初期の単語集編纂者にも通ずる意志の強さがある。

現代のわれわれの感覚からとらえれば、江戸期における単語集全体の質は決して高くなく、当時の日本人が効率的かつ効果的に英語の語彙を学んでいたかにも疑問は残る。しかし当時は現代のように情報が豊富ではなかったにもかかわらず、それぞれの単語集が体裁、配列、発音に気を配るなど、創意くふうが随所にみられる様子から、各単語集編纂陣の腐心と熱意を本研究者は感じ取ることができるのである。

ここで現代に立ち戻り考えてみる。英語力が伸びないと嘆く今の日本人にかけているものとは、オランダ通詞や福沢のような気概であると斎藤(2001)はいう。この主張は語彙学習にも通ずる指摘であろう。しかし科学的に裏づけされた効率的かつ効果的な方法をもって語彙を学習するこ

とができ、必要とあれば数ある単語集のなかから自身に合ったものを自由に選べるのが現代である。ゆえに当然気概も必要条件ではあるが、そのみで語彙を学ぶ必要はなく、江戸期の学習者に比べて格段に語彙を習得できる環境が整っている時代において、われわれがそれらを有効に活用し学ぶことに異論はないだろう。だがわれわれの語彙学習に対する「熱意」は、現在どこに向いているだろうか。英語を義務教育のもとであたりまえのように学んできたわれわれの多くは、その「あたりまえ」によって語彙学習の本当の目的を見失いかけてはいないだろうか。それは試験に合格するため、あるいは資格試験の得点を上げるなどの短期的な目標を越えたところにあると本研究者は考えている。

このことは単語集にも同様のことがいえる。現代の単語集とは何を目的に、どのような熱意をもとに編纂されているのだろうか。われわれが一般に考える単語集とは、いわゆる「受験英語」と強い結びつきがあるように思われる。しかし入学試験に英語が導入されたのは明治期以降のことであり、それ以前においても国を守るため、会話力を育成するため、あるいは西洋文化の摂取における足掛かりとするためなど、さまざまな理由によって単語集が編纂、そして利用されていた。このことは、われわれが心にとどめておかねばならない重要な歴史的事実の一つである。したがって英語教育の環境が刻一刻と変化している現代において、語彙学習とそれにとまなう単語集の編纂における意義を、われわれは今一度とらえなおす必要があるだろう。

註

1. ここでいう収集数とは、単語集の原本に加え、国立国会図書館で複写をして収集をした単語集の数のことである。
2. 語彙リストの例としてはThorndike & Lorge (1944) の *The Teacher's Word Book of 30,000 Words* や Coxhead (2000) の *Academic word list* がある。
3. たとえば、『DUO 3.0』(2000) や『ワン単 オンリーワンでワンダフルな英単語集』(2015) など。
4. 15冊のなかには一部訳語が記載されていない、いわば語彙リスト形式のものも存在するが、論文内での便宜を図り、今回は単語集の一つとしてとりあげた。
5. ただし伊村(2003)も指摘するとおり、江戸期の英語学習法は蘭学の影響が強く、その蘭学も漢文の学習法の影響を強く受けていた。するともっぱら行われていた学習法の一つは素読であろう。英学の入門期の素読用として、『英吉利単語篇』が用いられた可能性は十分にある。事実本書は明治初期に『英吉利単語篇 素読本』として似た体裁で刊行されていることが本研究者の調査で明らかとなっており、それ以前にも同様の形で用いられていた可能性は否定できない。しかしやはり訳語の無い単語集の需要はそこまで高くはなかったであろう。
6. 『英吉利単語篇』が編まれた同年に『法朗西単語篇』が刊行されており、両者は英語か仏語かを除けば収録語彙は同じである。したがってどちらの単語集にも対応しているという意味で、書名に「英」と「仏」どちらの文字も含まれているのである。

引用文献

- 赤尾好夫(1934). 『受験英語単語の総合的研究』 歐文社.
 赤尾好夫(1950). 『英語基本単語熟語集』 旺文社.
 赤須薫(2016). 「紙の辞書を考える」 南出康世・赤須薫・井上永幸・投野由紀夫・山田茂(編)『英語辞書をつくる——編集・調査・研究の現場から』(pp. 3-20). 大修館書店.
 荒木伊兵衛(1935). 『日本英語學書志』 創元社.

- 石川慎一郎 (1998). 「英語コミュニケーション語彙——大学入試用英単語集の有効性の検証」『言語文化学会論集』11, 3-19.
- 井田好治 (1982). 「長崎本『語厄利亜興学小筈』の考察」日本英学史料刊行会 (編) 『長崎原本語厄利亜興学小筈研究と解説』(pp.7-38). 大修館書店.
- 伊藤朱 (2005). 「『語厄利亜興学小筈』小考——「類語大凡」を中心として」『大阪大学言語文化学』14, 185-195.
- 伊村元道 (2003). 『日本の英語教育 200 年』大修館書店.
- 江利川春雄 (2011). 『受験英語と日本人——入試問題と参考書からみる英語学習史』研究社.
- 大阪女子大学付属図書館 (編) (1962). 『大阪女子大学蔵 日本英学資料解題』大阪女子大学.
- 大阪女子大学付属図書館 (編) (1963). 『大阪女子大学蔵 日本英学資料解題 (補遺)』大阪女子大学.
- 大阪女子大学付属図書館 (編) (1991). 『大阪女子大学蔵 蘭学英学資料選』大阪女子大学.
- 大村喜吉・高梨健吉・出来成訓 (1980). 『英語教育史資料 第5巻』東京法令出版.
- 勝俣銓吉郎 (1936). 『日本英学小史』研究社.
- 川澄哲夫 (1988). 『資料 日本英学史①上 英学ことはじめ』大修館書店.
- 河元由美子 (2003). 「メドハーストの『英和和英語彙集』」『英学史研究』36, 13-27.
- 斎藤兆史 (2001). 『英語襲来と日本人——えげれず語事始』講談社.
- 櫻井豪人 (2000). 『維新前後西洋語対訳単語集の基礎的研究』名古屋大学大学院博士論文 [未刊行].
- 櫻井豪人 (2014). 『開成所単語集I 英吉利単語篇・法朗西単語篇・英仏単語篇注解・対照表・索引』港の人.
- 杉森直樹 (2017). 「学術語彙リストによる語彙指導を考える——新JACET8000 共通学術語彙リストの開発」『英語教育』2, 30-31.
- 鈴木陽一 (2000). 『DUO 3.0』アイシーピー.
- 竹中龍範 (2008). 「幕末・明初の英語図解単語集：『對譯名物圖編』(慶応3年)ほか」『香川大学図書館報』4, 2-10.
- 竹村覚 (1935). 「日本英学史」英語英文学刊行会 (編) 『英語英文学講座』第15巻 (pp.1-45). 英語英文学刊行会.
- 田中茂範・佐藤芳明・阿部一 (2006). 『英語感覚が身につく実践的指導 コアとチャンクの活用法』大修館書店.
- 田野村忠温 (2017). 「日本最初期英語研究書の依拠資料と編集」『待兼山論叢』51, 21-56.
- 出来成訓 (1994). 『日本英語教育史考』東京法令出版.
- 中田達也・水本篤 (2015). 『ワン単 オンリーワンでワンダフルな英単語集』学研教育出版.
- 投野由紀夫 (1997). 『英語語彙習得理論——ポキャプラー学習を科学する』河原社.
- 投野由紀夫 (2015). 『発信力をつける新しい英語語彙指導：プロセス可視化とチャンク学習』三省堂.
- 鳥飼慎一郎 (2012). 「英学史から見た幕末期における異言語の衝撃と日本の対応」『ことば・文化・コミュニケーション』4, 127-156.
- 奥村孝亮・林潤一 (1959). 「長崎における英学の誕生」長崎英語教育百年史刊行委員会 (編) 『長崎における英語教育百年史』(pp.5-38). 英語百年記念事業委員会・長崎英語教育百年史刊行委員会出版.
- 原口裕 (1991). 「単語集・会話書」大阪女子大学付属図書館 (編) 『大阪女子大学蔵蘭学英学資料選』(pp.83-125). 大阪女子大学.
- 福澤諭吉 (2011). 『福翁自伝』斎藤孝 (編訳) (ちくま新書) 筑摩書房.
- 松村幹男 (1978). 「英語学習参考書の歴史」池田哲郎・宍戸良平・安藤賢一・小山田義文・清水克祐・林栄一ほか (編) 『教材と教育機器』(pp.86-102). 研究社.
- 丸山健一郎 (2017). 「阿部櫟齋 (1867 慶応3年)『絵入英語箋階梯』について」『同志社日本語研究』21, 30-42.
- 南出康世・乾善彦・前田広幸・櫻井豪人 (共編) (2000). 『大阪女子大学蔵 洋学資料総目録』大阪女子大学.
- 三好彰 (2014). 「幕末の英和辞書における比較考察」『東京大学言語学論集』35, 119-133.
- 雄松堂フィルム出版 (編) (1976). 『初期日本英学資料集成：マイクロフィルム版：収録書総目録』雄松堂フィルム出版.
- 渡辺実 (1962). 「三語便覧」大阪女子大学付属図書館 (編) 『大阪女子大学蔵 日本英学資料解題』(pp.30-32) 大阪女子大学.
- 渡辺実・川端善明 (1962a). 「語厄利亜興学小筈」大阪女子大学付属図書館 (編) 『大阪女子大学蔵 日本英学資料解題』(pp.1-10) 大阪女子大学.
- 渡辺実・川端善明 (1962b). 「ゑんぎりしことば」大阪女子大学付属図書館 (編) 『大阪女子大学蔵 日本

英学資料解題』(pp.55-64) 大阪女子大学.

- Boers, F., Lindstromberg, S., Littlemore, J., Stengers, H., & Eyckmans, J. (2008). Variables in the mnemonic effectiveness of pictorial elucidation. In F. Boers & S. Lindstromberg (Eds.) *Cognitive Linguistic Approaches to Teaching Vocabulary and Phrasology* (pp.189-216). New York: Mouton de Gruyter.
- Chen, H. (1990). Lexical processing in a non-native language: Effects of language proficiency and learning strategy. *Memory & Cognition*, 18 (3), 279-288.
- Coxhead, A. (2000). A new academic word list. *TESOL Quarterly*, 34(2), 213-238.
- Lotto, L., & Groot, A. (1998). Effects of learning method and word type on acquiring vocabulary in an unfamiliar language. *Language Learning*, 48(1), 31-69.
- Nakata, T., & Suzuki, Y. (2018). Effects of massing and spacing on the learning of semantically related and unrelated words. *Studies in Second Language Acquisition*. Advance online publication. doi: 10.1017/S0272263118000219
- Thorndike, E., & Lorge, I. (1944). *The Teacher's Word Book of 30,000 Words*. New York: Columbia University.
- Tinkham, T. (1997). *The effects of semantic and thematic clustering on the learning of second language vocabulary*. *Second Language Research*, 13(2), 138-163.
- Webb, S., & Nation, P. (2017). *How vocabulary is learned*. Oxford: Oxford University Press.

【本研究でとりあげた江戸期の単語集(年代順)】

- 岩瀬弥十郎(1811). 『諳厄利亚言語和解』(第三卷)
- 本木正栄(編)(1811)『類語大凡』『諳厄利亚興学小笈』
- 村上義茂(1854). 『三語便覧』達理堂蔵.
- W. H. Medhurst原著、村上英俊(翻刻)(1857). 『一名米語箋』発行所不明.
- Van der Pijl原著、長崎西役所(翻刻)(1857). Gemeenzame Leerwijs. 長崎西役所.
- しみづなほまろ(1860). 『ゑんぎりしことば』清水卯三郎蔵.
- Van der Pijl原著、蕃書調所(翻刻)(1860). *Familiar Method for those who begin to learn the English language*. 蕃書調所.
- 子卿原著、福沢諭吉(訳)(1860). 『増訂 華英通語』快堂蔵板.
- 石橋政方(1861). 『英語箋』自琢齋蔵版.
- 清水卯三郎原著(1864). 『飛良賀奈英米通語』師岡屋伊兵衛.
- 足立梅景(編)(1866). 『英吉利文典字類』伊月邸舎蔵梓.
- 著者不詳(1866). 『英吉利単語篇』開成所.
- 阿部喜任(1867). 『絵入 英語箋階梯』将翁軒蔵.
- 著者未詳(1867). 『英仏単語篇注解』開物社.
- 買山迂夫(編)(1867). 『対訳名物図編』発行所不明.
- 桂川甫策(1868). 『英仏単語便覧』理外無物楼蔵板.
- 著者未詳(1868). 『和英初学便覧 初編』以友堂蔵板.